

「道徳の時間」の基礎の基礎 その1

授業改善研「道徳部会」津田知充先生(大妻女子大学講師、元全国中学校道徳研究会長)資料より

道徳の授業に児童の興味・関心を持たせる指導のポイント

- 1 発問の大原則は、活用する資料を手掛かりに子どもの経験に結び付けて考えさせる発問がよい。
(手掛かり：資料を学ぶのではなく、資料から学ぶこと)
- 2 一回の授業では、内容項目の一つを取上げ、そこに示されている道徳的価値について、「思い込みの知」から「本当の知」への気づき（発見、変化）を体験する学習の時間とする。
- 3 教師の用意した発問で、児童たちは「考える」から「分かる」というプロセスを体験する。そのためには授業の中で教師と児童、児童相互の対話が欠かせない。そのときの対話を通して、児童達は互いの意見を吟味し合い、自分を見つめる力を養っている。
(対話：自分を見つめることになる → 自己肯定感につながる)
- 4 発問は、行いと区別して、その行いをさせている心のはたらきに着目させて考えさせる。
(道徳的实践力：価値が自らの行動となって表れる時の心の働きの意)
- 5 教師は、進んで学習活動の中に参加し、一緒に考えたり、話し合いに加わり、時には児童の発言に共感し合ったりしながら授業を進める。
- 6 発問の構成上、配慮する事柄
 - (1) 発問の前半部分では、人間の生まれながらにもっている本性が描かれているところに着目させて、児童自身をそこに重ねて考えさせる。
 - (2) 中心発問に至るまでの発問は、ねらいとする価値について「思い込みの知」から「自分にとって本当の知」に達する重要なところである。
学習する児童にとっては、この時間が自分にとってとても有意義なときとなるか否かの分岐点となる大事な場面である。
 - (3) 中心発問は、ねらいとする価値にかかわる事柄について、児童達が新たな気づき・発見と心の中に大きな変化をもつ瞬間である。一種の興奮状態になる。



「道徳の時間」の基礎の基礎 その2

授業改善研「道徳部会」津田知充先生(大妻女子大学講師、元全国中学校道徳研究会長)資料より

道徳授業をつくる基本となる事項

1 子どもの実態把握の着眼点

- (1) 生活・行動面だけでなく、気持ち・心・願いをとらえる。
- (2) 授業では、“ねらい”とする“道徳的価値”と関わる子どもの願いをとらえる着眼点をはっきりさせる。

2 「ねらい」と「指導」の着眼点

- (1) 内容項目の中から一つを選ぶ。
- (2) 行いと区別して道徳的価値を心に受け止めさせる。
- (3) 実践化(対症療法)の意識を持たない。
- (4) 子どもの意識の表層と心の奥底に働くものを理解する。



3 主題設定理由の着眼点

主題にかかわる子どもの実態を簡潔に述べる。次に授業のねらう価値について述べる。最後に子どもたちの内面に、ねらいとする価値を自覚として深めていく手立てとして、この資料を扱うということを述べる。

4 資料の選択と活用の着眼点

- (1) 行いよりも気持ちがとらえやすいもの。
- (2) 資料の描く生身の気持ちが、子ども自身の気持ちと重ねやすいもの。
- (3) 道徳的価値だけが強調されているものは不適切。
- (4) 資料は、ねらいに迫るためのきっかけとしてより深い指導が求められているのであり、よい資料を用いて心にしみ入るようにしようという考え方は好ましくない。

5 授業後の「子どもの観察」と「授業者の自己評価」の着眼点

「価値について、より深く考えるようになったか」、「ふだんの生活の中で価値を一層自覚できるようになったか」など、子どもの内面を教師がより正しく感じ取ることが、教師自身の授業改善や指導の向上のためには大切なことである。

そのための評価の観点は、次のような例示となる。

- (1) 今日の授業で、自分の中で“納得できた”とか“いいな”と思ったところはどこだろうか。
- (2) 今日の授業で、自分の中に“受け入れたくないな(納得できないな。よく分からないな)”と思ったところはどこだろうか。
- (3) 今日の授業全体を通して、どんな感想をもったか。
(ノートに書かせる場合の配慮として、思ったことをごく簡単に書くような指示がよい。また、教師がこの子の気持ちをもっと知りたいと思った場合には、子どもの立場を十分に配慮して、適切な方法で対応するのがよい。)